

19 世紀のドイツにおける「日常語」の統語構造

—文学作品に基づく会話史研究の試み—¹⁾

細川 裕史

1. はじめに

我々にとって身近な日常会話における言語とその歴史は、言語史研究の分野においては、ながらく中心的な研究対象にはなつてこなかった。「歴史会話研究」という学問分野の創設を提案した Kilian (2005) は、この日常会話の言語を研究することの困難さを繰り返し強調している。たとえば、録音機材が普及していなかった時代には音声言語をそのまま記録する術がなく、文章化することでしか会話を記録できなかったことや、ありふれた日常の会話にはそもそも記録される理由がなかったことなどから、研究の土台となるべき資料が極端に不足しているという問題がある。

19 世紀のドイツにおいて識字率が向上し、それまでは日常会話の言語にしか接していなかった非教養層にまで「標準的」や「規範的」とされる書きことばが普及したさい、彼らの「日常語」あるいは「日常的」な話しことばにはどのような特徴がみられたのか、という語史的に意義のある問いに答えるための資料もまた、多くのほかの時代・場所の「日常語」と同様に、大いに制約をうけている。Kilian (2005) では、歴史会話研究のための一次資料として、「会話そのものの記録」、「回想された会話」、「虚構の会話」という 3 種類の資料が挙げられている²⁾。会話を研究するうえでもっとも重要な一次資料は、会話そのものを書きとめた口述筆記であり、たとえば、裁判記録やインタビューなどがそれにあたる³⁾。しかし、

1) 本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 「19 世紀ドイツにおける標準語と日常語の混交に関する言説の社会語用論的研究」(課題番号 JP26370503、研究代表者・高田博行) の助成をうけて行われた。また、コーパスの作成に関しては、阪南大学の鶴飼亜須佳氏にご協力いただいた。ここに記して感謝する。

2) Vgl. Kilian 2005: 41f.

3) もっとも、こうした口述筆記であっても、記録者の判断や能力によって、記録される内容が選択されたり制限されたりしており、「会話そのもの」を完全に記録している

(会話の研究者が観察しているという特殊なケースを除けば) 日常会話がその場で記録される、ということは考えにくい。つぎに、「回想された会話」とは、会話を直接記録したものではなく、会話の当事者が時間が経ってから会話を思い出して(再構成して)書きとめた資料である。伝記にはこうした会話がふくまれることが比較的多く、それぞれの時代実際に起こされた会話を考察するための重要な資料となっているが、著名人の生涯を伝えるという伝記の性質上、各時代の著名人がおこなった会話に資料が偏っている⁴⁾。したがって、19世紀における非教養層の「日常語」を考察しようとした場合、ほぼ唯一の資料となるのが、この時代において書かれた「虚構の会話」である。Kilian (2005) は、しばしば外国語の学習教材や文学作品における「虚構の会話」を歴史会話研究の資料として挙げている⁵⁾。

以上のような資料に関する制約から、本論では、文学作品における虚構の日常会話に基づいて、19世紀における「日常的な」話しことばの統語に関する側面を考察する。本論で統語構造だけを扱うのは、語彙や形態に関する側面と違い、文学作品内で描かれる時代や話題ごとの差が少ないと考えられるからだ。

2. 調査対象

本論で扱うのは、テオドール・シュトルム (Theodor Storm. 1817-1888) の『人形つかいのポーレ』(*Pole Poppenspäler*. 1874) (= PP) およびテオドール・フォンターネ (Theodor Fontane. 1819-1898) の『ナシの木の下に』(*Unterm Birnbaum*. 1885) (= UB) における会話文および(比較対象として)地の文である。両作品を選択した理由は以下の3つである。(1) 両作品がドイツ帝国成立後に書かれており、統一的な書きことばが普及したあとの作品と見なせるため、(2) 両作品がほぼ同時期に書かれており、かつシュトルムとフォンターネが同世代であるため、(3) とともに北ドイツを舞台にしており、標準語話者と地域方言話者との対立関係が明確に描かれており、規範的で書きことば的な言語変種と地域方言的

わけではない。Vgl. Kilian 2005: 41f.

4) Vgl. Kilian 2005: 42f.

5) Vgl. Kilian 2005: 43f. もっとも、こうした資料における非教養層の「日常語」は、多くの場合、教養層に属する筆者によって書かれている。そのため、非教養層の言語そのものではなく、あくまでも教養層の目をとおして見た非教養層の言語として扱う必要がある。

で話しことば的な言語変種とが入り混じった日常会話が描写されているため。ただし、PPは、「人形つかいのポーレ」と呼ばれる人物が語る昔話を中心なので一人称で語られているのに対し、UBは、田舎の商人が貧困から抜け出すために完全犯罪を試みる、という筋書きを三人称で物語っている。こうした語りの形式の違いは、調査結果に影響を及ぼす可能性が考えられる。

2.1. コーパス

統計調査用に、Projekt Gutenberg（オンライン版）からデータを抽出してデジタル・コーパスを作成した。ただし、例をあげる場合には、該当箇所を示す必要性から、便宜的にレクラム版（Storm 1993 および Fontane 2012）から同一の箇所を挙げている。各サンプルの大きさは、PPにおける全会話文が約3,000語だったため、このサンプルに合わせて、それぞれ3,000語でいどとした。PPの会話文（= PPa）は、PPにおけるすべての会話文で3,329語、PPの地の文（= PPb）は、作品の冒頭からポーレが初めて人形劇を見に行く場面までの3,150語、UBの会話文（= UBa）は、第4章までのすべての口頭発話で3,345語、最後に、UBの地の文（= UBb）は、作品の冒頭から主人公の妻が偽装工作をおこなうために旅行に出る場面までの3,068語である。

2.2. 調査対象にみられる言語変種

Kilian（2005）によれば、「虚構の会話」に基づいて会話史を考察する際には、これらの資料に対する「各時代特有の要素や文学的・美学的な要素による影響は無視できない」（Kilian 2005: 43）。そして、こうした「虚構の会話」がどれだけ現実における会話に即しているのか、その真正性をその他の資料と比較検討する必要がある。そこで、統語構造の調査をおこなう前に、両作品にみられる言語変種の真正性について考察しておく。

PPは、舞台が北ドイツという設定になっているため、黒いシュミット（Der schwarze Schmidt）の息子たちによって低地ドイツ語の語彙が使用されている。たとえば、„Höger up!“（もちいと高う！ Storm 1993: 69）など⁶⁾。ただし、彼らは

6) Vgl. Brüchert 2007: 23ff., 34ff. 『人形つかいのポーレ』の訳に関しては、野原訳（2009）を参考にしたが、方言的な言語変種の使用が明確になるように訳し直している。

台詞がほとんどない脇役にすぎない。シュトルムは、粹物語の構造を好んで用いたが、この作品でも、「現在（1874年？）」の「私」が、40年前に知人のパウル・パウルゼンから聞いた彼の「人形つかいのポーレ」というあだ名の由来、すなわち人形劇の旅芸人一家との出会いと別れ、再会の経緯を語る、という構造になっている⁷⁾。語り手であるパウルゼンは、フリースラント出身で彼の声には「まだすこし故郷のことばの柔らかい響き」（Ebd.: 4）があったとされているが、基本的には標準的な言語変種を用いている。一方で、南ドイツからやってきた旅芸人一家の使用する言語変種には、はっきりとバイエルン方言の影響がみられる。たとえば、一家の娘リーザイの幼少期の台詞には、話しことば一般の再現とみられる語末音の省略とならんで、接頭辞 „ge“ の „g“ への縮約（用例1）や地域方言的な語彙（用例2）がみられる⁸⁾。

- 1) Freili! Halt nur so Resteln zu G'wandl für die Pupp'n; 's kost't immer nit viel! (せやで！ 人形の生地につかう切れ端や。それ、いつもそんな高うないし！ Storm 1993: 12. 強調筆者。以下同様)
- 2) Gel, Vater [...] da werd aa die Mutter nit mehr brumm'n. (なあ、おとん [...] そんなら、おかんも、もうブツブツ言わへんやろ。Ebd.: 38)

旅芸人一家のつかう地域方言的な言語変種について、シュトルムは、1874年4月11日の手紙で、方言のチェックを依頼した文献学者ゲオルク・シェーラー（Georg Scherer. 1824-1909）に対し、以下のように述べている⁹⁾。

私としては、ベルヒテスガーデンとミュンヘンの間あたりの方言のつもりなのです [...]。それに、この人たち [旅芸人一家] は、ドイツ中いたるところを旅してきたわけですから、純粋な方言を話すべきでもないのです（もちろん、特に子供は）。両親のほうは、もう、かなりその訛りが入っているでしょうけれど。もちろん、興奮したときや親密な雰囲気ときは、もっと訛りが出てもいいでしょ

7) Vgl. Vinçon 1988: 51f., 67; Scherer 2008: 60.

8) Vgl. Zehetner 1977: 115.

9) Vgl. Eversberg 1992: 86.

う。[...] 文章語 (Schriftdeutsch) しか知らない人には理解できないような方言の語彙は、一度も使うわけにはいきません。(Zit. nach Eversberg 1992: 86)

つまり、同作品における地域方言的な言語変種の使用は、日常会話を忠実に描写したものではなく、旅芸人一家が異質な存在であることを表現するための「文学的な要素」なのである。たとえば、パウルと偶然再会したリーザイについては、以下のように紹介されている。「いまや [...] 故郷の方言を話してはおらず、かすかにその名残が感じられるていどだった。というのも、[...] もっぱら中部ドイツに居たからだ」(Storm 1993: 52)。一方で、父親のほうには訛りが残っている。たとえば、過去分詞の接頭辞 „ge“ の脱落は、父親の発話 (用例 3) には見られるが、再会時のリーザイの発話 (用例 4) には見られない。

- 3) Ja, ja, da drunten an der See bei euch; wir sind nit wieder hinkommen; [...]. (せや、せや、海辺のあんたらんトコな、わしらはそれきり行かへんかってん。Storm 1993: 56)
- 4) Mein Gott, die hat der Schulz im Dorf uns abgenommen! (たいへん、あの村の村長に、それを取り上げられたんだった! Ebd.: 57)

UB の舞台は、1831 年からその翌年の、オーダー河畔の村に限定されている¹⁰⁾。同作品では、PP と同様に、標準語話者 (教養ある商人や聖職者) と地域方言話者 (農民) が対照的に描かれているが、この両者の対立関係は、登場人物の言語意識と関連して描写されている。ヒルデスハイムから嫁いできた主人公ラドシエクの妻 (標準語話者) は、「3 言目には „gebildet“ (教養がある) と口にする」(Fontane 2012: 18) といわれている人物で、その態度から、村の「農民たち」(Ebd.: 21) に軽蔑されている。その彼女は、夫に村での生活について不平を言うさい、彼女をからかう製油業者の妻を「„mir“ (私に) と „mich“ (私を) を間違えるシチメンチョウ女」(Ebd.: 19) と罵っている。

主人公の使用人はみな地域方言的な言語変種を使っているのだが、とくに頻繁にこの言語変種を使用するのが、主人公の隣人であり本作における探偵役ともい

10) Vgl. Bohrmann 2010: 8f.

えるイエシュケである。19世紀末の読者のうち、低地ドイツ訛りに親しんでいない読者のどれほどがこの言語変種を理解できたのか、フォンターネ自身、すこし疑わしく思っていたように思える。というのも、(コーパスには含まれていないが) イエシュケのセリフを会話の相手が標準的な言語変種でくりかえす箇所がしばしば見られるからだ(用例5、用例6)。こうした不自然な会話のすすめ方からみても、この作品においても、地域方言的な言語変種の使用は日常語の忠実な再現ではなく、「無教養な」村民を描くための「文学的な要素」といえるだろう。

- 5) „Joa, diss’ Hradscheck... he kümmt joa nu wedder ’rut.“ [...] „Ja, Mutter Jeschke [...] he kümmt nu wedder ’rut. Das heißt, er kommt wieder ’raus, [...]“(「ほうよ、あのラドシエクよ……あいつあ、またすぐに出てくるじゃろ」[…]「そうだな、イエシュケおばさん [...] あいつあ、またすぐに出てくるじゃろ。つまり、彼はまた出てくるだろう [...]」 Fontane 2012: 61)
- 6) „Awers Hradscheck is klook. Un he weet ümmer, wat he deiht.“ [...] „Gewiss weiß er das. Er ist klug. [...]“(「じゃけど、ラドシエクは賢いで。ほいで、自分が何をしよるか、いつも分かるとる」[…]「確かに、彼は分かっているだろうな。賢いから。[...]」 Ebd.: 97)

以上の点から、両作品における会話は、現実における言語使用を忠実に再現したのではなく、旅芸人や北ドイツの農民がいかにも話しそうなことばを描いたもの、つまり、そうした人物が会話において使用する言語に対する、同時代人の言語意識を描いたものといえる。

3. 統語レベルにおける「日常語」の特徴

この章では、PP および UB にみられる統語レベルにおける「日常語」の特徴(文の長さや並列的な統語構造など)を、先行研究の結果と比較しながら考察していく。今回の調査においては、Hosokawa (2014b) と同じ方法で統語構造を調査している。つまり、Admoni (1987) にしたがって、「文」(Ganzsatz) と「基礎文」(Elementarsatz) を区分し(「文」はピリオドからピリオドまでのひとまとまり、「基礎文」は文を構成する主文や副文などの文法的まとまり)、文タイプの区分につ

いては、Eggers (1973) の分類を用いた¹¹⁾。また、基礎文の分類に関しては、原則として Ágel/ Hennig (2006) における自立的な基礎文 (Elementarsatz1 = 直接法による主文) と従属的な基礎文 (ElementarsatzX = 副文および接続法による主文、不定詞句) を用いた¹²⁾。

3.1. 文の長さ

先行研究においては、1文の短さが話しことばらしさの特徴として、しばしば指摘されている¹³⁾。今回の調査では、1文の長さとして1文を構成する語数を調査した。

3.1.1. 1文を構成する平均語数

各サンプルにおける最短および最長の文は、PPaでは1語から71語、PPbでは2語から85語、UBaでは1語から55語、UBbでは2語から59語となっており、PPの方がより長い文を好む傾向がみられる。1語文の多くは用例7のような呼びかけだが、用例8のような省略もみられる。なお、PPaにおいて最長だった文(用例9)は、複数の文がセミコロンで並列的に結びつくという構造になっており、作者は、セミコロンの箇所をピリオドで区切り、より短い文に分けることもできたはずである。

7) Lisei! (リーザイ! Storm 1993: 20)

8) Meinst [du, dass...]? ([あんたはそう] 思うん? Ebd.: 12)

9) In seiner Jugendzeit, wie ihr es mir erzähltet, hat der selige Mann die kleine Kunstfigur geschnitzt, und sie hat einst sein Eheglück begründet; später, sein ganzes Leben lang, hat er durch sie, am Feierabend nach der Arbeit, gar manches Menschenherz erheitert, auch manches Gott und den Menschen wohlgefällige Wort der Wahrheit dem kleinen Narren in den Mund gelegt; – ich habe selbst der Sache

11) そのため、Admoni (1987) では計上されていない文法的に不完全な「文」、すなわち Eggers (1973) のいう「文相当句」(Setzung) も「文」として扱っている。Vgl. Eggers 1973: 41f.; Admoni 1987: 23.

12) Vgl. Ágel/ Hennig 2006: 64.

13) Vgl. Auer 2002: 131.

einmal zugeschaut, da ihr noch beide Kinder waret. (君たちが私に話したことによれば、故人は若いころにこの小さな人形を作り、それはかつて幸福な結婚の礎となったし、後には、故人は一生の間これを使って、仕事が終わったあと、多くの人の心を陽気にさせ、神にも人にも快い多くの真実のことばをこの小さな道化師に話させて——君たち二人がまだ子供だったころに、私自身も一度それを見物したことがある。Ebd.: 75)

1文を構成する平均語数は、表1に示したとおり、会話文(PPa、UBa)と地の文(PPb、UBb)とははっきりと二分された。いずれの作品においても、会話文は、地の文の半分ていどの長さしかなく、両作品における差はほぼ同じである(会話文が10語弱、地の文が20語強)。

	語数	文数	1文を構成する平均語数	標準偏差
PPa	3,329	351	<u>9.5</u>	8.7
PPb	3,150	137	23.0	16.0
UBa	3,345	372	<u>8.9</u>	8.6
UBb	3,068	152	20.2	12.2

表1：1文を構成する平均語数

19世紀の教養市民にとって書きことばの規範であったゲーテのことばは、『若きウェルテルの悩み』(1774)(= JW)においては平均語数が20.2語であり、その一方で、より話しことば的だと思われる19世紀の非教養層が書いた日常的な書きことばの平均語数は14.8語であった¹⁴⁾。これらの数値と比較すると、PPもUBも、地の文の長さは書きことばの規範とされたゲーテのことばに近く、一方の会話文は、比較的短い非教養層の書きことばよりもさらに短いことが分かる。

3.1.2. 文の長さの割合

文の長さについては、Eggers(1973)にしたがって、文をその長さごとに5つに分類し、その割合を比較することで、より精密に傾向を考察した¹⁵⁾。表2は、今

14) Vgl. Schikorsky 1990: 275, 278, 348; 細川 2014a: 55.

15) Vgl. Eggers 1973: 36.

回調査したサンプルに加え、細川 (2014a) におけるゲーテのことば (JW) と Eggers (1973) による FAZ (*Frankfurter Allgemeine Zeitung*) の調査結果を示したものである。

	JW	PPa	PPb	UBa	UBb	FAZ
1-8 語	28.6	<u>62.4</u>	19.7	<u>65.3</u>	21.7	9.6
9-28 語	47.6	33.0	48.9	30.6	52.0	66.8
29-48 語	17.5	<u>4.3</u>	26.3	<u>3.0</u>	23.7	20.7
49-68 語	4.4	<u>0.0</u>	4.4	<u>1.1</u>	2.6	2.7
68 語以上	1.9	<u>0.3</u>	0.7	<u>0.0</u>	0.0	0.4

表 2 : 文の長さの割合 (%)

いずれのサンプルでも、9～28 語の文が多く使われているが (4 つのサンプルで最多、2 つのサンプルで二番目に多い)、その割合には大きな差がみられる。FAZ では約 3 分の 2 の文がこのカテゴリーに分類されているのに対し、会話文 (PPa、UBa) では 30% ほどしかない。その一方でとくに目を引くのが、両作品とも会話文においては 8 語以内の文の比率が 60% 以上を占めていて、29 語以上の文が目立って少ないことだ。29 語以上の文は、どちらの会話文でも 5% 以下であり、これは、両作品とも地の文 (PPb、UBb) では 29 語以上の文が約 25～30% なのとは対照的である。用例 10 は、PP における会話文の一例だが、このように話者交替が頻繁におこる場合には、会話全体が極端に短い文の連続で構成されることがしばしばある。PP と UB の会話文が、文の長さについてはほとんど同じ傾向を示しているのは、作者の文体というレベルの問題ではなく、頻繁に話者交替が起こる日常的な会話行為を忠実に表現しようとした結果といえるだろう。

- 10) „Willst du spazierengehen, Lisei?“ [...]
 „Spazieren? [...] Ach du – du bist g'scheit!“
 „Wohin willst du denn?“
 [...] „Zum Ellenkramer will i!“
 „Willst du dir ein neues Kleid kaufen?“ [...]
 „Geh! laß mi aus! – Nein; nur so Fetz'ln!“

„Fetz'ln, Lisei?“

「散歩に行くの、リーザイ？」[…]

「散歩？ […] ああ、あんた——あんた、お利口さんやな！」

「で、どこへ行くの？」

[…]「反物屋へ行くんや！」

「自分の新しい服を買うの？」[…]

「もう！ ほっといてや！——違うで、ただの布切れや！」

「布切れかい、リーザイ？」 Storm 1993: 11f.)

3.2. 文・基礎文のタイプ

文のタイプに関しては、Eggers (1973) における4分類を用いた。つまり、文法的要素が不十分な「文」(Ganzsatz)である文相当句(Setzung)、主文ひとつからなる「文」である単一文(Einfachsatz)、主文が組み合わさった「文」である対結文(Satzreihe)、そして、主文と副文が組み合わさった「文」である付結文(Satzgefüge)である¹⁶⁾。話しことばらしさに関していえば、従属的な文構造をさける傾向が指摘されている¹⁷⁾。

3.2.1. 文相当句

主語や動詞といった文を構成するさいに重要な要素が欠けている文相当句は、書きことば的な文章にはあまりみられない。ゲーテのことばに関していえば、Eggers (1973) によればすべての文のうちの1%、比較的話しことば性が高いと思われる作品を調査した細川 (2014a) においても約7%しかなかった¹⁸⁾。すべての文に占める文相当句の割合を示したのが表3である。

16) Vgl. Eggers 1973: 41f.

17) Vgl. Auer 2002: 132.

18) Vgl. Eggers 1973: 43; 細川 2014a: 58.

	文相当句	文	%
PPa	73	351	<u>20.8</u>
PPb	0	137	0
UBa	85	372	<u>22.8</u>
UBb	0	152	0

表3：文相当句の割合

ここでも、会話文と地の文で明確に二分することができるだろう。なにしろ、両作品ともに、会話文にしか文相当句が使用されていないのだから。会話文においては、文相当句が約20%という高い割合で使用されている。文の長さと同様にJW（7%）およびFAZ（3%）と比較すると、この数値の高さがより明確になる¹⁹⁾。両作者が会話文にだけ文相当句を使用したのは、偶然ではない。会話では、先行する発話をうけて発話をおこなうため、用例10で示したように語の省略が可能だからだ。用例10には、„Spazieren?“（散歩？）や„Nein; nur so Fetz'ln!“（違うで、ただの布切れや！）、„Fetz'ln, Lisei?“（布切れかい、リーザイ？）といった文相当句がみられるが、いずれも先行する発話（„Willst du spazierengehen, Lisei?“[散歩に行くの、リーザイ？]や„Willst du dir ein neues Kleid kaufen?“[自分の新しい服を買うの？]）をうけて行われた省略であるため、聞き手は容易に文意をとることができる。そして、このような語の省略が、結果として短い文を好むという傾向を引き起こしている。

3.2.2. 単一文

単一文は、主文ひとつからなる最も簡潔な文である。単一文がすべての文に占める割合を表したのが、表4である。

19) Vgl. Eggers 1973: 43; 細川 2014a: 58.

	単一文	文	%
PPa	157	351	44.7
PPb	38	137	27.7
UBa	154	372	41.4
UBb	36	152	23.7

表4：単一文の割合

両作品とも、会話文（40%強）のほうが地の文（20～30%）よりも頻繁に単一文を使っていること、そして、それぞれの会話文と地の文の差は数%しかないことが分かる。ゲーテのことばでは、Eggers（1973）によればすべての文の21%、細川（2014a）におけるJWでも20%が単一文であり、PPおよびUBの地の文における割合に近い²⁰⁾。シュトルムとフォンターネが、規範的な書きことばにおける単一文の割合を意識していたとも考えられる。会話文における割合は、とても高いように思われるが、Schikorsky（1990）が調査した19世紀の下層階級による日常的な書きことば（53%）やEggers（1973）におけるFAZ（46%）ほどには、単一文を使用していない²¹⁾。つまり、両作品の書き手は、会話文では極端に短い文を好んで用いていたにもかかわらず、文のタイプという点では単純な文構造を極端に多く使っていたわけではないのだ。いずれにせよ、両作品に同じ傾向がみられる、という点は興味深い。なお、用例10では、単一文と、その単一文をうけて語の省略をおこなった文相当句とが、ほぼ交互に表れている。

3.2.3. 自立的な基礎文と従属的な基礎文の割合

文構造の複雑さに関しては、文のタイプだけでなく、Ágel/Hennig（2006）にしたがって自立的な基礎文が全体に占める割合も算出した。この割合は、JWでは47.6%であり、Ágel/Hennig（2006）において話しことばの典型例として挙げられた現代のラジオでの会話では80.3%である²²⁾。PPおよびUBにおける割合を示したものが、表5である。

20) Vgl. Eggers 1973: 43; 細川 2014a: 59.

21) Vgl. Eggers 1973: 43; Schikorsky 1990: 277.

22) Vgl. Ágel/Hennig 2006: 65, 67; 細川 2014a: 61.

	自立的な基礎文	従属的な基礎文	Σ	%
PPa	362	100	462	78.4
PPb	252	142	394	63.9
UBa	337	173	510	66.1
UBb	240	167	407	59.0

表 5 : 自立的な基礎文の割合

これまでは、会話文と地の文で明確に二分できたのだが、この点ではそうした明確な違いは見られない。自立的な基礎文の割合は、会話文にしても地の文にしても PP の方が高くなっており、PP の地の文 (PPb) が UB の会話文 (UBa) とほぼ同じ数値である。そして、PP の会話文における自立的な基礎文の割合 (約 80%) は、前述の Ágel/Hennig (2006) における現代のラジオでの会話に近い数値になっている。PP の方が自立的な基礎文が多い理由としては、PP は地の文が一人称による語りだから地の文においても書きことば的で複雑な構造を避けたためとも考えられるが、他の観点からは PP と UB の地の文に明確な違いがみられなかったため、この点にだけ差異がみられることの説明がつかない。UB では、より単純な構造をもつはずの会話文においても、用例 11 や用例 12 のような複雑な構造をもった文が連続する長ゼリフがみられるので、あるいは、こうした発話の影響で UB のほうがより複雑な文構造をもつにいったのかもしれない。どちらの例も夫婦の会話における主人公たちの発話なのだが、複数の従属文をふくむ 29 語以上の長い文が連続している (用例 11 では 45 語、51 語、29 語、用例 12 では 43 語、55 語、52 語)。

- 11) Ich bin nicht aus dem Haus gekommen, so daß die Leute darüber geredet haben, die dumme Gans draußen in der Ölmühle natürlich an der Spitze (du hast es mir selbst erzählt), und habe jeden Abend vor einem leeren Kleiderschrank gestanden und die hölzernen Riegel gezählt. Und so sieben Jahre, bis die Kinder starben, und erst als sie tot waren und ich nichts hatte, daran ich mein Herz hängen konnte, da hab ich gedacht, nun gut, nun will ich es wenigstens hübsch haben und eine Kaufmannsfrau sein, so wie man sich in meiner Gegend eine Kaufmannsfrau vorstellt. Und als dann der Konkurs auf Schloß Hoppenrade kam, da hab ich dich gebeten, dies bißchen hier

anzuschaffen, und das hast du getan, und ich habe mich dafür bedankt. (私は、郊外の搾油所にいるあのバカなガチョウ女が当然率先してみんなが話しているみたいに [それを教えてくれたのは、あなた自身よ]、家を出てきたわけじゃないし、毎晩、空っぽの衣装ダンスの前に突っ立って、横木を数えていたのよ。それから7年ものあいだ、うちの子たちが死んでしまうまでそうして、あの子らが死んで私には何もなくなって、そのことに執着できるようになってから、ようやく思ったのよ、もう良いじゃないって、私だって少しは魅力的でありたいって、近所の人たちが商人の奥さんと聞いて想像するような、そんな奥さんでありたいって。それから、ホッペンラーデ城で破産手続きがあったとき、ここで、ほんのちょっとこれを手に入れてと頼んだら、あなたがそうしてくれたから、私はお礼を言ったの。Fontane 2012: 19)

- 12) Wie fand ich dich damals, als du wieder nach Hause kamst, krank und elend und mit dem Stecken in der Hand, und als der Alte dich nicht aufnehmen wollte mit deinem Kind und du dann zufrieden warst mit einer Schütte Stroh unterm Dach? Ursel, da hab ich dich gesehn, und weil ich Mitleid mit dir hatte, nein, nein, erzürne dich nicht wieder... weil ich dich liebte, weil ich vernarrt in dich war, da hab ich dich bei der Hand genommen, und wir sind hierher gegangen, und der Alte drüben, dem du das Käppsel da nähst, hat uns zusammengetan. Es tut mir nicht leid, Ursel, denn du weißt, daß ich in meiner Neigung und Liebe zu dir der alte bin, aber du darfst dich auch nicht aufs hohe Pferd setzen, wenn ich vor Sorgen nicht aus noch ein weiß, und darfst mir nicht Vorwürfe machen wegen der Rese drüben in Neu-Lewin. (おまえが病気になり、体調を崩して杖をつきながら家に戻ってきて、親父さんが、子供を連れて帰ってきたおまえを受け入れようとせず、おまえにとっては藁の寝床と屋根さえあれば満足だったあのとき、僕は、おまえのことをどう思っただろう？ ウルゼル、そんなときにおまえに会って、おまえに同情したから、いや、いや、また腹を立てないでくれ……おまえを愛していたから、おまえに夢中だったから、おまえの手をとってここへ来て、おまえが帽子を縫ってやってる向こうの老牧師に、僕らを一緒にしてもらったんじゃないか。ウルゼル、おまえも知っているように、おまえへの気持ちや愛は昔のままだから、僕はそのことを悔いてはいないが、だからといって、僕が心配事のせい

で途方にくれているときに偉そうにしてほしくないし、ノイ＝レヴィンのレーゼのことで僕を非難しないでくれ。Ebd.: 20f.)

3.3. 「文接続の線状性」

Auer (2002) によれば、口頭発話では「箱入り文」が避けられ、話し手は副文をなるべく主文の外に置こうとする、という傾向がみられる²³⁾。「箱入り文」の使用頻度に関連して、Ágel/ Hennig (2006) は、あるテキストにおいて基礎文がほかの基礎文（「箱入り文」や挿入文）によって中断される頻度を算出することで、「文接続の線状性」(Linearität der Satzfügung) を明らかにし、そのテキストのもつ話しことば性の高さを数値化する方法を提案している。「文接続の線状性」に関して、Ágel/ Hennig (2006) および細川 (2014a) によれば、ゲーテの JW では基礎文 18.6 に対して 1 回の中断が、現代のラジオでの会話においては 114 に対して 1 回の中断がみられた²⁴⁾。PP および UB における線状性を示したものが、表 6 である。

	基礎文の中断	基礎文	文構造の線状性
PPa	7	462	<u>66.0</u>
PPb	34	394	11.6
UBa	8	510	<u>63.8</u>
UBb	28	407	14.5

表 6 : 「文接続の線状性」

「文接続の線状性」に関しては、ふたたび会話文 (60 台) と地の文 (10 台) とで明確に二分できる。書きことばと話しことばという観点からみれば、地の文はどちらも、書きことばの規範とされたゲーテのことばにかなり近い数値だが、会話文のほうは、現代の会話における数値にくらべると半分ていどしかない。とはいえ、両作品とも、会話文における数値は地の文における数値の 4～6 倍である。なお、線状性が低い地の文であっても、多くの場合、せいぜい 1 文に 1 回の中断があるていどであり、「箱入り文」が二重になっている例はほとんどみられ

23) Vgl. Auer 2002: 135ff.

24) Vgl. Ágel/Hennig 2006: 65, 68; 細川 2014a: 62.

ない（用例 13）。

13) Die Gesellschaft war bis auf drei Mitglieder herabgesunken; die vor Jahrhunderten von den alten Landesherzögen geschenkten silbernen Pokale, Pulverhörner und Ehrenketten waren nach und nach verschleudert; den großen Garten, der, wie du weißt, auf den Bürgersteig hinausläuft, hatte man zur Schaf- und Ziegengräsung verpachtet.（協会の会員は3名にまで減っていて、昔の領主たちから何世紀もまえに贈られた銀の杯や火薬筒、名誉の首飾りなどは次々と安売りされ、あの歩道まで続いている君も知っている大きな庭は、ヒツジやヤギを放牧するために貸し出された。Storm 1993: 14)

3.4. まとめ

統計調査の結果をまとめると、一人称と三人称という語りの形式の違いにもかかわらず、統語構造に関しては PP と UB の会話文と地の文はそれぞれよく似た傾向を示していることがわかった。唯一、今回の調査でこの傾向がみられなかったのは、自立的な基礎文の割合だけである。この点については、作中の長ゼリフの有無が影響しているのかもしれないし、シュトルムとフォンターネの個人的な文体特徴という可能性もある。両作者の別の作品を調査するなどして、さらに検証する必要があるだろう。本研究で明らかになったのは、以下のような、会話文の統語構造に関する共通性である。（1）文の長さに関しては、8語以内の極端な短文の多用と29語以上の長文の回避がみられる、（2）文と基礎文のタイプに関しては、会話文でのみ「文相当句」が使用されているが、その一方で、会話文であっても、単一文という単純な構造の文タイプが極端に多く使われていたわけではない、（3）文構造の線状性に関しては、会話文における線状性の数値は、地の文にくらべて極めて高かった。

4. おわりに

今回の調査からは、シュトルムとフォンターネという19世紀末のドイツを代表する作家が、ドイツにおける「日常的な」会話のことばを、第3章で紹介したような統語的特徴を持つものと認識していたことが確認できた。しかし、今回の

調査では 2 人の作家の 1 作品ずつしか扱っておらず、これらの作品でみられた特徴が 19 世紀のドイツにおける「日常的な」会話の特徴を表しているといえるかどうか、より大きなコーパスに基づいて検証する必要があるだろう。また、自立的な基礎文の使用頻度のように、両作家の個人的な特徴かもしれない傾向もみられたため、シュトルムとフォンターネの別の作品で同様の調査を行い、今回明らかにした傾向がみられるかどうか確認しなくてはならないだろう。そして、両作品では、異なる言語変種を用いることで教養ある市民の発話とそうではない人々の発話とが明確に差異化されていたが、両言語変種間の相違もまた注目に値する。これらの調査を今後の課題としたい。

一次資料

Fontane, Theodor (1885): *Unterm Birnbaum*. In: *Projekt Gutenberg-DE* (<http://gutenberg.spiegel.de/buch/unterm-birnbaum-4437/1>) (Stand: 9.9.2015).

Fontane, Theodor (2012): *Unterm Birnbaum*. Stuttgart.

Storm, Theodor (1874): *Pole Poppenspäler*. In: *Projekt Gutenberg-DE* (<http://gutenberg.spiegel.de/buch/pole-poppenspaler-3483/1>) (Stand: 9.9.2015).

Storm, Theodor (1993): *Pole Poppenspäler*. Stuttgart. (シュトルム、テオドール [2009]「人形つかいのポーレ」[野原章雄訳]、日本シュトルム協会編訳『シュトルム名作集 I』、275-326 頁)

参考文献

Admoni, Wladimir (1987): *Die Entwicklung des Satzbaus der deutschen Literatursprache im 19. und 20. Jahrhundert*. Berlin.

Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.)(2006): *Grammatik aus Nähe und Distanz. Theorie und Praxis am Beispiel von Nähetexten 1650-2000*. Tübingen.

Auer, Peter (2002): Schreiben in der Hypotaxe – Sprechen in der Parataxe? Kritische Bemerkungen zu einem Gemeinplatz. In: *Zeitschrift „Deutsch als Fremdsprache“* 39. Jahrgang, Heft 3. S.131-138.

Bohrmann, Michael (2010): *Theodor Fontane. Unterm Birnbaum*. Stuttgart.

Brüchert, Erhard (2007): *Platt neben Hoch (in der deutschen Literatur). Interpretationen*.

Oldenburg.

Eggers, Hans (1973): *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. München. (エガース、ハンス [1975] 『二十世紀のドイツ語』 [岩崎英二郎訳] 白水社)

Eversberg, Gerd (1992): Kommentar. In: Theodor Storm: *Pole Poppenspäler. Text, Entstehungsgeschichte, Quellen, Schauplätze, Abbildungen*. Heide. S.73-116.

細川裕史 (2009) 「社会語用論的語史研究とはなにか?—社会コミュニケーションとしての語史に関する一考察」学習院大学ドイツ文学会『研究論集』13号、67-94頁。

細川裕史 (2014a) 「文章語に取り込まれた『近いことば』の統語レベルにおける特徴—書簡体小説『若きウェルテルの悩み』を一例として」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』55号、51-68頁。

Hosokawa, Hirofumi (2014b): *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a. M. et al.

Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1985): Sprache der Nähe – Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch* 36. Berlin/New York. S.15-43.

Scherer, Stefan (2008): Pole Poppenspäler. Romantische Poesie der Kindheit in realistischer Prosa der Erwachsenenwelt. In: Christoph Deupmann (Hg.): *Theodor Storm. Novellen*. Stuttgart. S.48-67.

Schikorsky, Isa (1990): *Private Schriftlichkeit im 19. Jahrhundert. Untersuchungen zur Geschichte des alltäglichen Sprachverhaltens »kleiner Leute«*. Tübingen.

Vinçon, Hartmut (1988): Gefährdete Idylle. Theodor Storm. Pole Poppenspäler (1874). In: Walter Zimorski (Hg.): *Theodor Storm. Studien zur Kunst- und Künstlerproblematik*. Bonn. S.47-75.

Zehetner, Ludwig G. (1977): *Bairisch*. Düsseldorf.

(ほそかわ・ひろふみ 阪南大学経済学部経済学科 准教授)

Zur syntaktischen Struktur der „Alltagssprache“ im 19. Jahrhundert in Deutschland

Eine historische Dialogforschung anhand vom literarischen Werk

Hirofumi Hosokawa

Wie war das gesprochene Deutsch des alltäglichen Gesprächs im 19. Jahrhundert, durch das sich die einheitliche und als Norm betrachtete Schriftsprache auch unter breiten sozialen Schichten verbreitete? Auf diese Frage zu antworten, ist zwar für die Rekonstruktion der Geschichte der deutschen Sprache sehr wertvoll, aber mangels Quellen, die uns Informationen über das damalige authentische Gespräch anbieten, kann man diese Sprache nicht direkt untersuchen. Kilian (2005) schlägt daher unter Anderem vor, aufgrund des literarischen Werks, in dem das fiktionale Alltagsgespräch dargestellt wird, die alltägliche gesprochene Sprache in der Vergangenheit zu untersuchen, wobei man sorgfältig analysieren muss, inwieweit das untersuchte fiktionale Gespräch den wirklichen Gebrauch der Zeit widerspiegelt.

In diesem Artikel wird die syntaktische Struktur des Alltagsgesprächs in Th. Storms „*Pole Poppenspäler*“ (= PP. 1874) und Th. Fontanes „*Unterm Birnbaum*“ (= UB. 1885) statistisch untersucht, um damit zumindest eine Seite der Alltagssprache im 19. Jahrhundert zu rekonstruieren. Ein Digitalkorpus wurde dafür gebaut, der aus vier Samples mit je ca. 3.000 Wörtern besteht (das Gespräch und der Text außer dem Gespräch in den beiden Werken). In den beiden Werken werden alltägliche Gespräche in Norddeutschland zwischen gebildeten Personen, die hauptsächlich eine standardsprachliche Variante benutzen, und bildungsfernen Personen, die meistens dialektal sprechen, dargestellt. Die Gespräche in den Werken soll man als etwas literarisch Inszeniertes behandeln, denn es ist leicht zu erkennen, dass die beiden Autoren durch solche Gespräche den Gegensatz zwischen dem Bürgertum und den unteren sozialen Schichten verdeutlichen.

Untersucht werden die Satzlänge, der Typ des Satzes und Elementarsatzes sowie

die Linearität der Satzfügung nach Ágel/Hennig (2006), die in vorliegenden Arbeiten als Merkmal der gesprochenen Sprache betrachtet werden. Die Ergebnisse zeigen, dass Satzstruktur im Gespräch in den beiden Werken ähnlich sind, obwohl sie verschiedene Stile haben (PP wird durch einen Ich-Erzähler erzählt, UB ist hingegen ein Kriminalroman, der in der dritten Person erzählt wird): Man verwendet im Gespräch in den beiden Werken relativ oft Sätze, die weniger als 8 Wörter umfassen, während man Sätze, die mehr als 29 Wörter umfassen, vermeidet. Daher sind Sätze im Gespräch halb so lang wie im Text außer dem Gespräch. In Bezug auf den Satztyp befindet sich die „Setzung“, der grammatisch nicht vollkommene Satz, nur im Gespräch. Diesen Satztyp verwendet man oft als direkte Wiederholung eines Teils davon, was ein Gesprächspartner gesagt hat. Auffällig ist, dass die beiden Autoren auch im Gespräch nicht so häufig den „Einfachsatz“ gebrauchen, der aus einem einzigen selbständigen Elementarsatz besteht, obwohl man mit diesem Satztyp eine einfachere Satzstruktur bauen und damit eine wahrscheinliche mündliche Äußerung inszenieren kann. Die Linearität der Satzfügung zeigt die Anzahl des Elementarsatzes pro unterbrochenem Elementarsatz, und daher, wie häufig eine Sprache den verschachtelten Nebensatz und die Parenthese verwendet. Diese Linearität der Satzfügung im Gespräch ist in den beiden Werken deutlich höher als im anderen Text, während der Zahlenwert der beiden Gespräche im Vergleich zum Gespräch im 21. Jahrhundert niedrig ist.

Wenn man das Verhältnis zwischen dem selbständigen und abhängigen Elementarsatz betrachtet, kann man keine Tendenz feststellen, nach der die beiden Gespräche ähnlich sind. In PP wird der selbständige Elementarsatz im Allgemeinen deutlich öfter als in UB verwendet. Der Grund könnte sein, dass der Protagonist von UB mehrmals monologisch redet, wobei er ziemlich lange Sätze mit mehreren abhängigen Sätzen verwendet. Aber es könnte auch sein, dass es sich um einen Unterschied zwischen den Schreibstilen von Storm und Fontane handelt. Um darauf zu antworten, ist eine weitere Untersuchung aufgrund eines anderen Korpus nötig.